

世間解

第四五五号

令和八(二〇二六年)一月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

一未聞の益一

読みやすい
横書き版



あたらしい年を迎えた。皆さまには決して変わることのない「本願のおはたらきの中、「なんまだぶ、なんまだぶ…」とお念仏さまを相続のことと存じます。昨年末の除夜会（大晦日のお勤め）・修正会（元旦のお勤め）には多くの方がご参拝くださいました。除夜の鐘は皆さんにお撞きいただき、二六〇を超える、それぞれの思いを込めた鐘の音が響きました。大晦日の鐘つきが無事に行えますことは近隣の皆さまのご理解があつてのことと、近隣の皆さまに篤くお礼申しあげます。誠に有り難うございます。

また、ご本堂にも百人を超える方が西法寺の阿弥陀さまの前にお座りくださいました。ありがたい縁でした。

“なもあみだぶ”というお念仏さまを称えられないという場所や時間はありません。“なもあみだぶ”というお念仏さまは、いつでも・どこでも称え聞かせていただくことが出来るのであります。

いつでも・どこでもとはいま・ここでとあります。阿弥陀さまや「往生くださつた方々は、いつでも・どこでもいま・ここでいろんな事にあり、いろんな思いを持つていかねばならないこの私を願い続け、支え続けてくださつておるのであります。そのおはたらきが私にお念仏となつてくださつてるのであります。

「あのね、お念仏は出来ないんじやなくて、やらないだけですよ。いや、たとえ声に出なくたって、なもあみだぶつをいただくことはできるんですよ。へなかなかお念仏できません」という人がいらっしゃるけど、あれは出来ないんじやなくて、やらないだけだな。」

梯實圓和上が繰り返し、繰り返しお諭しくださったお言葉であります。

「なんまだぶ、なんまだぶ…」とお念仏さまを称えていただくことがあります。「いつ・どこで・なにがやつてくるか分からぬ世界に“いのち”いただいている私たちだからこそ、いま・ここで・なにがやつても大丈夫なものに遇わせていただいでおかねばならんのじやないの。それが阿弥陀さまのご本願であり、なもあみだぶつというお念仏ですよ。」

これも、梯實圓和上が繰り返し、繰り返しお諭しくださったお言葉であります。お念仏さまを相続（称えて）いただくことであります。お念仏さまとは何か、お念仏さまを称えるとはどういうこととか…。それをお聞かせいただく場が西法寺でのご法座の場なのであります。どうぞ、どうぞ大晦日だけではなく毎月のご法座に足をお運びください。そこで、お念仏さまのお心を、温かさを一緒にお聞かせいただきましょう。

「そんな、難しいこと私には分かりませんわ…」などと全然ご心配いただくことはありません。当たり前であります。

一、「至りてかたきは石なり、至りてやはらかなるは水なり、水よく石を穿つ、心源もし徹しなば菩提の覚道なにごとか成ぜざらん」といへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聴聞を心に入れまうさば、御慈悲にて候ふあひだ、信をうべきなり。ただ仏法は聴聞にきはまる」となりと「云々」。

『蓮如上人御一代記聞書』というお聖教のお言葉であります。

ご法義に遇い、それをお聞かせいただき味わせていただくというのは、ボタボタと落ちる小さな水滴が、同じ所に落ちつづけていると固い石を凹ませるようなものである。とおっしゃるのであります。

「未聞の益」善導大師さまの『法事讚』というお聖教でこのお言葉に遇わせていただきました。「未聞」とは「今まで聞いたことがない」ということであります。へこなん今まで聞いたことなかつたなあというお育てはお聞かせいただくことによつて恵まれるのであります。聞き続けさせていただいてこそ、「ああ、そ

うだつたなあ」と私の日暮らしにご法義が生きてくださるのであります。

ご自分の経験や価値観で「私にはまだ関係ない」などとご判断いただかない」とであります。「未聞の益」のことはまた来月に…。